

「とはすがたり」の時代と人物

河 北 騰

はじめに

言うまでもなく「とはすがたり」は、通例、後深草院二条と呼ばれている女性の作である。成立は、断定できないけれども、花園天皇の正和二年（一、三一三）以前の事と考えられている¹⁾。もし、この年とすれば作者五十六才の時という事になる。ここに到るまでの、約百年間の時代様相について、初めに一応簡単に見て置こう。

増鏡にも詳しく語られている通り、かの「承久の変」で、倒幕の挙に大敗して、後鳥羽院は隠岐へ、順徳院は佐渡へ、土御門院は阿波へ遠流とされた。のち鎌倉幕府執権は熱慮の末、後堀河・四条の天皇を立てた。が、意外にも幼い四条帝の急死によって、又も一頓挫をしてみまい、次には後嵯峨帝が至尊の位にいたのであった。この為、後嵯峨は幕府の意向に全く異を唱えず、至って柔順であり何ら見る所のない数年間であったが、この前から西園寺実氏（太政大臣）は幕府の信任も厚く、着々と地歩を築き続けて居り、長女皇子を皇后として入内させ、ここに後深草・龜山二帝の生誕を見て、ますます政界に重きをなした。

やがて、帝位は四才の後深草に譲られ、次女公子はこの後深草の后として入内した。これが「とはすがたり」の中で有名な東二条院であり、作者から見れば恰も源氏物語中の弘徽殿の悪后のような存在の女性である。処で、後嵯峨院は、この後深草から龜山の両帝の治政に掛けて、ずっと実に廿八年もの長い間、院政を続けたのであるが、後深草のやや虚弱で体格も小柄、心理的にも内向的な人間性よりも、むしろ龜山帝のやや豪毅で強壯、気骨のありそうな人柄の方を愛していた物らしい。これは大宮院（皇子）も同じ考えだった様子で、後嵯峨院の崩御後に、幕府がわざわざ、この点を大宮院に確かめたりした事を、増鏡では記している程である。

このような意向があった為、龜山帝即位、そして讓位後は後深草の予期に反してその皇子は立坊できず、やはり大覚寺統の後宇多が立坊し即位、龜山帝の院政がそのまま続いた。作者二条が生れた正嘉二年（一、二五八）は、後深草が退位し、龜山帝即位の丁度一年前の年に当たっている。又、作者は九才の時、西行の修行物語を見ていたく感銘したと言っているが、この年（文永三年）は鎌倉の將軍宗尊^親が廢され、代ってその子惟康王を新將軍とした事件があり文

永五年には蒙古の使者が国書を齎らす騒ぎもあり、幕府では少壮の北条時宗を執権にして、難局の対処に当らせるといふ世相になっていた。(この年、後嵯峨院の五十才の賀は、この蒙古の事により中止となったが、この件は私も前稿に於いて、少しく言及した。)

二条が十四才の正月に、初めて後深草の愛を受けたのは、上述のように龜山帝の時代で、後深草には何の実権もなく、極めて不遇無聊であり、不満の多い時期であり、年表に拠れば雪の曙こと、藤原実兼の権大納言昇任は一ヶ月後の事であった。宮廷では龜山院が退位後も長く院政を続けたいとの意向から、「後院」を設置、後院別当を任命し政権の長期安定を計る為の方策があり、持明院統の後深草の不满が昂じ、憤慨の余り幕府に対し、院の尊号も兵仗も返してしまふとの強い意志表示に出た為、困却した幕府は皇子(伏見帝)を次の東宮に立てるとの申入れをして、漸く後深草の怒りを解いた。

これより少し先、文永十一年には第一回の蒙古の来襲があり、辛うじて台風により国難は救われた。これが同年十月廿日の事である。後深草が、実妹の前斎宮愷子と契ったのは、その十一月初頭の事実である。蒙古の再度の来襲は弘安四年(一、二八二)閏七月で、防戦に朝野を挙げて懸命であったのであるが、作者は廿四才、「有明の月」の子を孕り、その秘密を知った後深草に、生れる子を引渡せと言われてそれに従う、といった恰も別世界の如き事実が語られるのも、同じ年の初秋八月初である。

例の「北山准后九十の賀」は、増鏡にも「とはずがたり」にも至って詳しいが、これは作者の廿八才のこと。後宇多帝が廿一才で讓位、伏見帝の即位となり、待ちかねていた後深草が漸く院政を開始

したのは正応元年で、この時作者は卅一才だが、突如として出家を敢行したらしく(この点は後述する)、又、永福門院の入内も、後醍醐帝の生誕もこの年であった。龜山院の陰謀かとされる浅原為頼の乱入事件は正応三年で、これは増鏡などに詳記されている。翌年、実兼は太政大臣となるが、前記の両皇統の帝位継承は、依然として紛糾し、後伏見、その退位、後二条(大覚寺統)、その退位、花園帝(持明院統)となり、次に又も大覚寺統の後醍醐帝となり、そしてあの思わしい「正中の変」、更にはそれが序曲となって、南北朝の一大抗争が繰り展げられるのであった(正中の変の年に、作者が七十才までの寿命であったと仮定して、大要右のようなのが、約百年間の史実であり、私たちは、あの長くて陰惨で不幸な南北朝抗争史の、その前夜を生きたのが、この作者二条であったことを踏まえて考えて見たいと思う。このような史的背景や世相を頭に入れながら、次には「とはずがたり」に登場する主要人物、即ち、後深草院二条(以下、単に二条と略称)・後深草院・有明の月・雪の曙について、その人間描写等をやや詳しく検討して見たい。

一、作者二条について

二条の人物論については、早く富倉徳次郎、次田香澄、松本寧至、井上宗雄、福田秀一、標宮子の各氏らの詳しい考察があり、それぞれ秀れた見解が示されていて、今さら贅言を加えるにも及ばない程である。しかしながら、私は今までの微細な歴史物語研究の歩みに於て、その中の増鏡が、実はこの「とはずがたり」を重要な資料として多くの部分が書かれているという事実を知ったのだが、その時から、歴史物語が、この日記文学作品を資料にするという我が

国の歴史物語のあり方に、強い学問的興味を抱き続けていたのであった。よって、この作品をじっくり読み返し、考えつめて右の問題をも解き明かして見たいと思つたのである。

さて、二条は前述の通り正嘉二年（一、二五八）の生れ。父は大納言久我雅忠、母は前大納言藤原隆親の娘（大納言典侍でい）であった。不幸、母には二才で死別、四才で後深草に目を掛けられて宮中生活を始めたるは、作品中に明かである。そして十四才の正月早々、院に操を捧げたところがあるが、後述の実兼は初恋の人であつたらしい。

先ず、彼女は頗る美貌で容姿も端麗な、教養も豊かそうな気品ある女性であつたようだ。この点は、宮中生活での様々な事柄を記した巻一、二、三の中には勿論、出家後の尼姿での遍歴生活を記した巻四、五の中でも、彼女の赴く先々で、多くの男たちが近付きになる事を求めたり、親交を結びたがつたりする所からも、明らかである。しかし、一見愛嬌ゆたかで脆そうな感じもあつて、そこが美貌で端麗・気品と相俟つて、男好きのする女性でもあつたらしい。

それに加え、村上帝の皇子具平親王の源師房から数えて八代目という、彼女の所謂竹園八代の一門という意識は人一倍強烈であり、家門の高さからする誇りは甚だ強かつた。従つて、どだい女房などの身分での官仕え等は、容認できない家柄なのであると確信している。

一方、才智の面では、先ず和歌の才はなかなかの物であり、臨機に甚だ即妙に詠歌し応答しているが、絶世の鬪秀歌人という程ではなく、又、沈思苦吟型の（増鏡に見る宮内卿のような）思索一途の歌人でもなかつた。音楽の才では、幼少時から翌練を積んだ琵琶の腕は相当な物であり、（後深草
と龜山）西院の源氏物語遊びの盛儀では、明石

上を割当てられた程である。

唯、性質としては、一見して清楚・清純であるようだが、その実、宮廷では至って多情好色に走る所があり、衝動的な筆に出て奔放、淫佚な面が強いように思われる。そして成り行き上、平然と嘘や偽りを述べて押し通し、やや偽善的な言動をも憚らぬ点も伺われる。例えば、実兼との子が六ヶ月であるのを、院の子で四ヶ月だと奏上し、さて生れた子は死産でしたと奏上して、五体健全な其の子を実兼の正室の所で育てるべく引取らせる所など。勿論、彼女をしてこの様に淫佚、奔放、偽善的な態度に赴かせたのは、後深草院の誠意のない愛、信じ切れない彼女への態度などによる強い心理的・肉体的不満の表れであるが故、その欲求不満を強ちに誹責するのは當るまい。

作者が数多くの男たちとの恋愛や愛欲の淵にのめり込んで行き、あさましい性愛の様々を展開するのが前半の三巻で、これを端的に宮中編、愛欲編などと呼ぶ向きもあるが、二条は其の様な背徳的な行いや不倫を語る際も、厳しい自己反省や悔悛の念が殆ど見られないのは、特徴的な点であろう。無論、相手が帝や院、最高貴族である場合、その暴力的な求愛を拒み切れない事は当時の実情であろう。しかし、二条の場合、こういう危機には大抵が、「例の心弱さは」と言つて、それを受入れ、又「わが咎ならぬ誤り」乃至は「わが過ちにあらねど」を頻発して、自己弁護を計っている。それは、決して私の過失でなく、天命の如きもので、不可抗力な事の次第であつたのだ、と自分に言い聞かせ、読者に訴えたい様である。

こういう考え方でありながら、片方で例えば、院と実妹愷子との情交の手引をした後、その一部始終を傍らで聞き耳立てて知ろうと

したり、「扇の女」「ささがにの女」(尙れも)と院との出会いを確かに聞き知って、その感想を作品に書きつけているのである。これをも、院の不誠実な愛情への復讐の表れと言えるのであろうか、疑問である。要は二条の倫理観の問題であると思う。

作者二条は、多くの男達に同時に愛された事を、まるで誇りに思い、誇らしげに回想し記述するという面がある。この作品は、日記文学とは言うものの、その実は虚構意識もかなり強く、作者による事実や描写の改変は相当に多いであらうし、自分の言動の紛飾や時には韜晦的な表現が、意外にさまざま存在する事を忘れてはなるまい。それを考慮するにした所で、併し二条の男性遍歴はすさまじいものがある。即ち、後深草、実兼、有明の月、近衛大殿、龜山院、その他らが挙げられるが、この内、初めの三人との間に五人の子を設けた筈であるけれど、これらの子を何れも簡単にやりとりして、恰も取引きの具にして憚らない所も、私達の愕然とする点である。わが子への愛情や人間の絆について、当時の世相や風潮もあつたかも知れないが、やはりここでも、二条の倫理意識を問題として良いと思う。

更に、作者は頗るナルシズムが強く、自分をとかく悲劇の女主人公とし勝ちな所がある。尤も、女性にこの性質はつきものであるが、二条は、美しく高貴な家柄の姫君が、母に幼く死別し、帝の愛を受けて孕った後、父にも死なれ、運命のままに斯様な愛の生活を辿り、こうして院の最期に殉じたのだとの筋書を思い入れを込めて「問はず語り」したかった為に、この作品に取り掛ったに違いない。

唯一つ、不審でならないのは、二条を排斥したい東二条院へ宛てて後深草院が親書を送り、二条を弁護する所で、その手紙の文言を

始めから終り迄、委細漏らさず明記している点である。これは、信書を秘匿するという現代の私達と異なり、恐らく其の草稿の段階などで、祐筆のような司の人から入手した物か、又は二条の創作の手が大きく加わった物であらうかと思われるが、二条の自尊心(裏返して言えば、彼女のナルシズム)を、相当にしっかりと満足させてやまない体の文章になっている。

次に、二条の出家という重大事について。作品では、卷三と卷四の間の空白の四年間にそれは敢行されたものようである。今少し厳密に言うと、彼女卅二才の二月末に關東へと下向する話で卷四が始まるので、二条出家は、私の考えでは其の前年ではなく、下向の直前、然も釈迦如来が涅槃に入るという二月十五日の前頃であろうと私は想うのである。

処で、私が問題としたいのは、当時の人の一生に於て、かけ替えない重大な転進であり、正に住む世界を全く異にする程大事たる出家について、二条は其の動機や決心を全然語っていない点である。恐らく二条の内心で、不退転の決断というものが下されたであろうが、それを毫末も作品に記していないのだ。思えば、二条は九才の頃、西行の修行絵巻?を見ていたく感銘したようだし、十七才の時には、先年生んだ皇子が夭折し、身も消える程に悲嘆の限りを尽くしたようで、これらの悲痛な体験は、大きく脱俗出離へと、彼女を追いやる過去体験であったかも知れない。

しかし、それ以後、廿六才の秋に退去させられる迄、二条は華やかで軽佻な宮中での生活を続けているのである。それ以後も北山准后の賀には、大宮院の呼出しもあって奉仕をしているのであった。こうして見ると、皇子夭折に人知れず紅涙にむせんだであろうが、そ

れ以後の十四年間の間に、恐らくは対人問題の葛藤や生活の不如意、ひどい厭世観、そして何よりも後深草らの愛の絶望といった事が、決定的に作用したものはあるまいか。特に、彼女三十才の三月には伏見帝が即位、後深草は待望の院政を開始し、充実し余念の無い様な感じの風評の院を聞き、つき放されたような孤独感と虚しさ、二条を責め苛んだのであろう。いわば、全身的に打ちのめされた空虚さと寂寥とであった。卅二才ともなった二条は、やはり身体的にも既に若くはなかった。右のような孤独や絶望、そして寂寥に捕われた二条は、あの父雅忠の遺訓を思い出し、悲しく傷ましい心で出家を決意し実行したのだと思う。これは、あの誇り高く闊達であった若の二条には、到底書きつけて他人に示せる境地である訳がない。この為に、出家の理由や其の顛末などを一切書かなかったのであり、決して、出家記事の欠落や意識的削除、又は一巻の脱落などによるものではないと考える。

二条に関して今一つ触れたいのは、作品中の意図的構築という点である。例えば、巻四、五の諸国遍歴の所など、善光寺参りは虚構であろうと言われ、足摺岬行きも事実であるまいと言われている。⁽⁷⁾更に、志村有弘氏の論で、あの後深草の霊柩を泣きながら裸足で追う条りも、西行の鳥羽院葬送の場面を思い深かべて書いたものであろうと言う(女流日記「とはずがたり」所収)。西行への傾倒を認めるに私も吝かではないが、私はむしろ、白千鳥と化した倭武命の魂魄を、傷つき乍ら、泣き泣き追って行く皇妃たちの話を踏まえているものと考えたい。⁽⁸⁾

作者は三十四才の二月末? に六年ぶりに忘れ得ぬ後深草に石清水八幡で邂逅し、感激にひたったが、その後四十九才の三月八日に

遊義門院に久々に逢い、右殿を下りなすむ門院に、肩を踏台として体を投げ出し、涙にくれるのも、これ又、石清水八幡の社頭なのである。言う迄もなく、石清水は作者の家・源氏の氏神であり、この奇遇は靈験あらたかな石清水のお力に他ならぬという靈験譚の意図もあろう。更に、既に平安朝以来、三月中の午の日は石清水八幡の臨時大祭と定まっていた賑わうといわれている。一方、後深草の参籠は、史実では四月廿六日から七日間である事は疑いない。二条があれ程に感動し印象深かった院との再会を、右のように大きく誤る事はあり得まい。これは、多分、石清水の春の臨時大祭の直前という時期に、意図的にこれら二つの奇遇を設定し、余情豊かに構築した話なのであろうと思う。

二、後深草院について

後深草は、前記の通り後嵯峨と大宮院の間に寛元元年(一、二四三)に生れ、嘉元二年に六二才で崩じている。この院は、多くの資料では生来小柄でやや短小な体軀、貧弱な体力の持主であったという。例えば、本書巻二の粥杖事件の所で、東の御方に後ろから抱きつかれ「あな悲しや。人やある人やある」と言うばかりで、力づくで振りほどく事もできなかったと書いている条りからも、明らかであらう。又、幼年時はどうも足腰がしっかりと立たず、一種の身体障害があった様だが、建長元年の二月一日、閑院内裏の焼亡の折、火急の災厄に驚いて、俄かに足腰がしゃんとした旨、増鏡には記されている。七才の時であらう。

六才年少の弟龜山院は、「御本性いと華やかにかしこく、御才なども昔に恥ぢず、何事もととのほりてめでたくおはず」と増鏡が言

う通り、才智すぐれ、闊達で豪毅、男らしいのに比べ、一種のひげめ、或いは劣等意識のような物を常に感じている人であつたらしい。それが、あの龜山院へ過度な程の卑屈な姿で、二条をお伽に提供してしまい、又、父帝・母后共にこの龜山院へ末長く皇統をと望んだり、というような表われになったのであろう。光源氏と兄朱雀院との間柄を、ふと連想させる。政治的な特別な才能もなく、学才・詩才共に見るべきものはない。可もなく不可もない歴代の帝王であり、もしこの作品に主人公として詳述されなければ、注目もされなかつたろうとの渡辺静子氏の言説に、私も賛成する。唯、詩の朗詠や今様などには甚だ秀れていたようである。尤も、政治能力とは言つても、当時は政治の実権は悉く鎌倉幕府の掌る所で、地方行政も守護や地頭に抑えられていて、天皇や院が親政できる余地は全く無い時代であつた。

さて、後深草の二条に対するあり方は、実に我が倭勝手であり、暴君的な振舞いで、何ら二条内心の屈辱感や悲しみを考慮しない態度に描かれる。尤も、二条と初めて契る所では、「形は世々に変わるとも、契りは絶えじ。逢ひ見る夜半は隔つとも、心の隔てはあらじ」又、「大納言(雅忠)も、つひにはよもと覚ゆる。いかにもなりなば、いとど頼む方なくならんずるこそ。我より他は誰かあはれも掛けんとする」等と仰せられて、さまざま愛を誓われたと書いている。しかし、これらは男が使う愛の常套語であり、本当は「我のみ育くむべき心地せしに、事の違ひもて行きし事も、げに浅かりける契りにこそ」と巻四に見えるのが、本音を吐いた所であろう。

このようにして、院は二条に愛を誓いつつ、他の女性と交わる時は極めて享樂的で頽廢的であり、その相手の女や二条の「女性の人

格」などは些かも顧慮しない振舞いであつた。例えば「扇の女」「ささぎにの女」を同夜に召し、前者は院も三年越しの恋とて盛装をして、二条の手引で契るが、奥床しさのない首尾に全く幻滅した院は、後者を雨の夜中待たせた事など忘れ果てる。二条の「どうされますか」との進言に漸く思い出して呼寄せようとするが、一晚中、雨の戸外で待たされ、衣裳の染めは雨の為に下着へ透り、黒髪は水から上つたようで見える影もないこの女の姿。さすが女も、「お召しに悦んで参上したのが愚かでした。もう、どうぞ帰らせて下さい」と懇願をする。二条が独断で帰してやつた後、出家した印しの一束の髪と悲しい歌とが、院に届けられた。

又、前斎宮と契る時も、二条に手引を強要し、「私に長年仕えて来たよしみで、この事を叶えてくれたなら、お前を本当に誠意があると思おう」と言つて迫る我が倭ぶりであつた。つまり、二条と院の間柄は、愛人というのでもなく、勿論夫婦というのでもなく、絶対専政の君主と女奴隸のような惨めなものである。先に詳述した如く、政治的に何ら実権なく、全く張合いのない虚しい日々を送つていた院は、これ程までに頽廢と官能の生活に耽つていたのである。大官院や龜山院その他との宴遊による大酒淵飲の泥酔ぶりも、驚く程に頻繁にこの作品に書かれているのである。

以上に見た通り、後深草はこの作品中には、やはり至つて頽廢的であり、(次に見るように)倒錯した欲望の持主であつて、嫉妬深くて内向的に陰湿な所の強い人、と言わねばなるまい。實際の後深草帝はどうであつたか知らぬが、次の諸例文を見るならば、右の評は否定できないものである。(原文の引用は余りに長くなる為、省き、それぞれ筆者の要約した文を挙げる。)

④実兼と二条との密通に気づいていたらしく、折にふれ、二条にも

実兼にも暗に諷刺する事がたび重なる。

◎二条と高僧性助との秘密の交渉を知った院は、二条に向って執拗な皮肉を言つて困らす。

○二条の母に新靴を教えられた後は、その女性の恋人の目を盗んで常に二条の母に通じたと語る。

◎二条と性助との秘密を立聞きで知って、それを性助に詳しく告げ、性助を随喜させる。

◎近衛大殿の望むなりに二条を貸してやり、逡巡する二条を立上げ、其の情事を立聞く。

○弟の亀山院と二条と院は同室に臥していて、亀山院と二条の事を、泥酔した形で許す。

以上、逐一羅列するに堪えない類いの事だが、これらの例を見れば、決して後深草は通常の、常識や道義観のある姿ではなくて、やはり変態的な、歪んだ嗜虐的な性格と言ふ他はない。前引の論文で、渡辺氏は強くそれを否定されたが、私にはどうしても、作品の中の後深草院は、男性的で明朗で豪邁な帝王であるとは思われぬのである。二条が、真実、心の奥底から敬仰慕慕できなかったのは話なるかなと考える。

三、有明の月

「有明の月」の仮名で呼ばれる人物が誰であるかに関して、まだ論議の結着がついた訳ではない。浄助法親王を充てようとする玉井幸助説、性助法親王に擬する福田秀一・松本寧至氏の説、開田准后法助であろうとする宮内三二郎説などが鼎立した。しかし、やはり私は、かの後深草の述懐の言葉、すなわち、「いはけなかりし御

程より、かたみにおろかならぬ御事に思ひ参らせ」とある所からして、「私とあの方とは、あの方の幼少年時代から並み大抵ではない親身な間柄と思ひ申し上げていて」云々の気持の通り、院の実弟の性助法親王をさすものと考えて良いであろうと思う。

さて、性助は後嵯峨院の第六皇子として宝治元年（一一四七）に生れた。後深草より四才の弟という事になる。作品中、この僧は愛染明王その他、大法秘法を存分に駆使するように加持祈禱する所から、真言密教を極めた高僧であることは、一目瞭然である。思うに、空海が高野山で説いた聖典「十住心論」等は、その奥義まで体得し切つた傑僧と思われていたのであろう。三十六才で惜しまれて死去したようである。想像だが、後深草とは似ても似つかず、いかにも真言宗の高僧にありがちな、堂々たる体格と、妖しく人を射るような炯々たる眼光、自信に充ちた説法話術を持つ壮年男子という出立ちの人であつたろう。

二条と知り合つたのは、彼の廿八、九才の時とされて居り、六年余りの灼熱の恋であつた。このような傑僧は、二条にとつて、その出自の高貴さと、現在の崇拜措く事のできない法界での偉大さ、更に後深草には到底得られないような男性的魅力として映じたのであつた。これが、最初の内は格別の愛情を覚えぬ位だった性助に、次第に二条は魅せられて、彼女の方から進んで性助を愛するようになり、挙句、二人の愛は寧ろ烈しい情欲の燃え上りとなって行き、目もくらむ程の熱愛となるが、突如、男の急死により終止符を打たれる所以であつた。

さて、其の最初の出会いは、後白河院の八講の折に顔を合せた事という。二条は十八才だが、亡き父の事を懐しげに思い出話をする性

助に心も和らぎ、父を想ってしんみりしていたが、俄かに性助の話は変って二条への切々たる求愛の意志表示を、長々と掻き口説く。

この辺りは、性助の一途でひたむきな、他人の思惑などに逡巡しない強引な性格が伺える。二人が、決定的な関係に落ちるのは八ヶ月後、後深草が重い病となり、その祈禱僧に選ばれたのが性助であった。祈りの為の撫で物である形代を持参した二条に、突如「泣く泣く抱きつき給ふ」ような迫り方で、辟易しつつも二条は彼の求めに従ってしまふ。やがて「祈禱の時刻です」との従僧の声に促されて秘法を捧げるが、終えるや、二人は又も愛欲の淵にのめり込み、院の病気をよそに、連日ただ、狂おしく愛し合うのであった。法の厳かな世界と、卑しい人間の煩惱との不可思議さを、二条は次のように記している。つまり、

起き別れぬる御名残もかたはなるものから、なつかしくあはれとも言ひぬべき御さまも、忘れがたき心地して、局にすべりに打ち寝たるに、
(巻二)

というように、女心を捕えられて行ったのだ。

この性助との関係は暫く途絶えていた後、叔父隆頭の中介で逢ったが、余りに執拗な性助の情けに厭気がさし、疎々しく扱った後日、性助から、八百万の神仏に起請して共に魔道にも赴かん云々との怖ろしい呪いの文が来て、二条は正に身の毛もよだつ思いがしたという。何十年もの禁欲の生活を続けたこの高僧が、二条の豊満さに目もくらみ、耽溺してしまふいわば第一住心、即ち異生羶羊心の境地へと、急転直下、まろび落ちたのである。

やがて、二条の廿一才の頃、遊義門院の病惱加持に院参した性助につつままり、その喋々たる口説きを聞いた時、それを院に逐一、立

聞きされ、今度は院の勸奨の下に性助と愛し合うはめとなり、二人の愛は愈々油を火に注ぐが如く熱烈なものとなって行く。ここに、良識ある人々にはどだい理解できぬような、頹廢しきった官廷社会の性愛絵図があるだろう。こうして、院の管理の下に、二人の愛は命の限りを尽して燃焼する。性助は、自分の栄誉も境遇も一切を捨てても良いから、二条と山奥の庵で昼も夜も共に過したいとさえ訴える。

一方、院はその秘密を何と性助に直接語り、男女の道は不可避であり自然なのなどの旨を、如何にも広い心の態度の様に語り、容認する。その兄の理解ありげな言葉を聞いて、性助が涙を流して随喜し感謝するのも奇妙だがやがて二条は性助の子を妊む。それを夢見で知った院は、わざわざ二条に、或る女人が死産したので、生れる性助の子を引渡すよう、言いつけに来る。二条もこれに従う事になる。二条廿四才の十一月に男児を生むが、院に直ちに引取られ、同月中旬に性助が来て契り、二人は共に一番いの鴛鴦が懐ろに入る夢を見て、又も性助の子を孕ったと夢告げあり喜ぶ。しかし、折柄の流行病で重態となった性助は、あっけなく同月廿五日に急死を遂げてしまふ。悲しみに暮れる二条に、形見として性助は、一つの玉篋にきっちりと小袖を敷き、そこへ砂金を何十両か填め合わせて贈ったのであった。翌年八月二十日頃、性助の忘れ形見の男児を生むが、この子は手元で育て上げたいと思う。

以上は、二条の目を通しての性助の形象であるが、史上実在の性助は弘安五年師走十九日に死んで居り、この作品とは所々差異はあるのだが、しかし、後深草の実弟に生れ、学徳も験力も、最高を極めて尊崇された人だった点は同様である。作品では、この偉大な僧

が、壯年期に及んで女色に接し、煩惱の囚となり、正に煩惱熾盛で意馬心猿の墮獄僧となつて行つたのである。とは言へ、愛欲の爲には何物をも恐れず怯まず、法悦・恍惚の至境を求めて真一文字に直進し、それを手に入れたといふこのディオニュソスのな生き方は賛美されて良いかも知れぬ。勅撰集に36首も入集している。

四、雪の曙

この人物が、太政大臣まで昇つた実兼である事は、動かぬ所である。依つてここでは、その前提に立つて、人物評論を試みて見たい。

先ず、史上実在の実兼は、かの北山に豪邸西園寺殿を築いた公經太政大臣の曾孫に当る。父公相が割合に早く死んだ為、彼は廿一才で家督を嗣ぎ、関東申次という要職も引継いだ。廿三才で権大納言となり、伏見帝が東宮の時、東宮大夫に任じている。右大将、内大臣を経たが、かの大宮院姞子も東二条院も叔母に当り、妹の嬉子は亀山院の后とあつて、持明院・大覚寺の両統へも万全の政治布石を施している一門の棟梁であつた。実兼は又、自分の長女の永福門院が伏見帝の后となり、次女の昭訓門院（これが前述の二条との娘）が亀山院の后に立ち、三女後京極院は後醍醐帝の后というように、正に完璧の政治態勢を張りめぐらせていた。

前述した通り、関東申次の実兼は、幕府の威光を背景にし、宮廷では頗る幅を利かせ、又、豪華な北山殿公經からの財力も物凄くて、政治的・経済的にも頗る恵まれた幸い人であつた。文化的な面にも理解と能力があつたらしく、かの玉葉集や風雅集などの勅撰集で有名な歌人を育て上げ、自らも又、主要歌人の一人として活躍

し、玉葉集に六二首が採られている程である。政権の面でも、とかく大覚寺統にのみ偏つて継承されそうな帝位を、実兼が鎌倉に交渉を重ねて、後深草院政をも可能にするように実現した功労は大きかつた。

元享二年（一、三三二）に七四才の高齡で死んだが、このように、実在の実兼は政治家としての力倆が秀れていた事は勿論、中庸を得た出所進退により人望もなかなか厚く、聡明で人格豊かな最高の貴紳であつたらしい。唯、部下の爲兼が、歌才を自惚れ借上の振舞いがあつたとして、遠流の嚴刑に処した所は、実兼の峻厳さを語る。

では、次に作品中に見る実兼を論じよう。彼は先ず、二条の娘時代の初恋の人であつたらしい。二条の事を父雅忠は、この九才年上の名門の好青年に生涯托そうと考えていたふしがある。従つてこの二人は許婚者のような感情を互いに持っていたのではないか。もし、二条が穩當に、この西園寺太政入道の正室として納まっていたならば、北山准后には及ばないにしても、世人の篤い尊崇を集めて、幸運な大北の方としての一生を、送つた事であらう。

二条十四才の正月、父と院との約束により、後深草の愛を受けるが、その何日前かに実兼から、如何にも美麗で豪華な衣裳が二条に贈られる。それを、父の質問に困つて二条が、北山後の辺りより頂いた……と胡麻化す所は、愛しい実兼の名を口にできぬ含羞を示す部分。十五才の夏秋の頃、院の子を懷妊するが、この時訪れた実兼が、亡き父の追憶を語るため、つい口舌に負けて心ほだされ、この初恋の人・実兼と關係を持つてしまふのであつた。

二条が十六才で皇子を生んだ後も、実兼は足繁く通つて来て、共

寝の夢に扇と油瓶の不思議な告げを二人が受ける。これは、正に懐妊の夢兆なのであり、十七才の九月に女兒を生み、目の円らな、黒髪（この人が昭述した。）の可憐な子であったが、実兼が直ぐ連れ去ってしまう（訓門院この点は前）。

実兼との間は、この後も頻繁に続いていたが、前記の通り宮廷の両皇統へも、手ばかりなく娘を納れている実兼は、性助法親王が宮中の加持祈禱の度毎に二条と親昵し始めた事や、好色の名の高い龜山院も、二条を憎からず想って居られるらしい事など、逸早く気づいていたのであろう。引取った女兒が病気になる、とかく快癒しないのは、母方に連なる人に障りがある為だ、と言われているとて、二条に久々に女兒と対面させる実兼は、多分に二条の日常を憂えて、親心で以て二条牽制を計ったものであろう。二条も又、多くの男と枕を重ねながらも、実兼の事を「まことの新枕とも言ひぬべき」人として、思慕し続けていたのではあつたらしい。

一方、実兼も二条へは優しい心使いを常に持続していたようであり、彼女が宮中を出奔、或る山寺に隠れているのを訪問した翌日は、多くの尼僧たちに迄、立派な衣裳を各々に贈り与えて喜ばれたり、二条の伏見御所参上に衣服の調達ができず困っていると、丁寧に恥かしくない一式を調べてくれたりするので、心底から二条は感謝している。細かく気のつく、優しい、誠意の溢れた貴族という実兼像であり、源氏物語の薫君を想わせる様に書いている。

だが、二条が伏見御所で龜山院と関係したかの時、随行していた一人だった実兼は誠にむごい思いをしらうし、又、秘曲の伝授を口実にして赴いた夜も、二条が老閨白と契る事になる顛末を知った実兼は、どの様な思いをしたであろうか。次第に二条から疎々しく

なっていくのも、全く無理はあるまい。こういう実情でありつつも、二条の心が遠って来る時もあるうと、実兼は秘かに待ち続けたのであつたらう。薫大将のような形象化がなされていることを、私は強く感じるのである。

院の病が重篤を知り、狼狽して頼って来た二条を、一旦は「毫碌したのか想い出せぬ」と拒んで帰らせ、再度の懇願の時は、危急の院を拝顔できるよう八方手を尽してやる実兼の床しきは、実に感動的である。二条の胸に、永遠に抱き続けた初恋の人の理想に応わしい。実兼は、正に才・徳・知を兼備した誠実の人、宿徳の長者として、描かれているのである。

ここに作者の理想的男性の姿を見得るのである。

注1 成立年代については、日本古典全書や日本古典集成「とはすがたり」解説。

2 拙稿「増鏡の政治性について」(獨協大学諸学研究・平成二年十一月発行)。

3 西沢正二氏著「増鏡研究序説」(桜楓社刊)に詳細に整理されている。

4 志村有弘氏の多くの論文など参照。「説話文学の構想と伝承」所収。

5 出家の年時については、諸学者も概ねこの年時に一致している。

6 新発意の清やかな心で旅立ったであろうし、西行の「如月のもち月の頃」の影響もあるだろう。

7 小口倫司氏「二条の善光寺参詣について」雑誌「駒沢国文」昭和三九年五月号。

8 神谷道倫氏「二条の足摺御行について」雑誌「駒沢国文」昭和三九年五月号。

9 松本肇至氏が「中世宮廷女性の日記の中で、この考えを示されている」(中公)(新書)。

10 渡辺静子氏「とはすがたりにおける後深草院」(女流日記 文学講座 同)「とはすがたり」所収論文。(獨協大学教授)